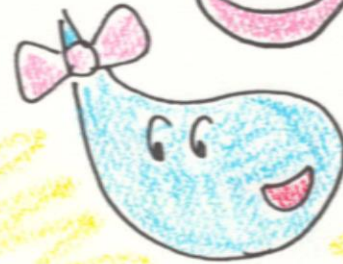


みず

たび びと

水の旅人

「わっしょい、わっしょい」



わたしは、ぴよんじ。

はだのめいすい わ で みすべ
秦野名水の湧き出る水辺にすんでるのよ。

水と緑がいっぱい、なごすずきはらじらやいんなごじやじ。



♪「ケロケロ」「ケロケロ」♪

たくさん歌って楽しみましょじ。

「わーん、わーん」

「えーん、えーん」

「あれね、きみたちどっししたの？」



「どっしの子だろっつ、どっしから
来たんだい。」

「わーん、わーん」

「えーん、えーん」

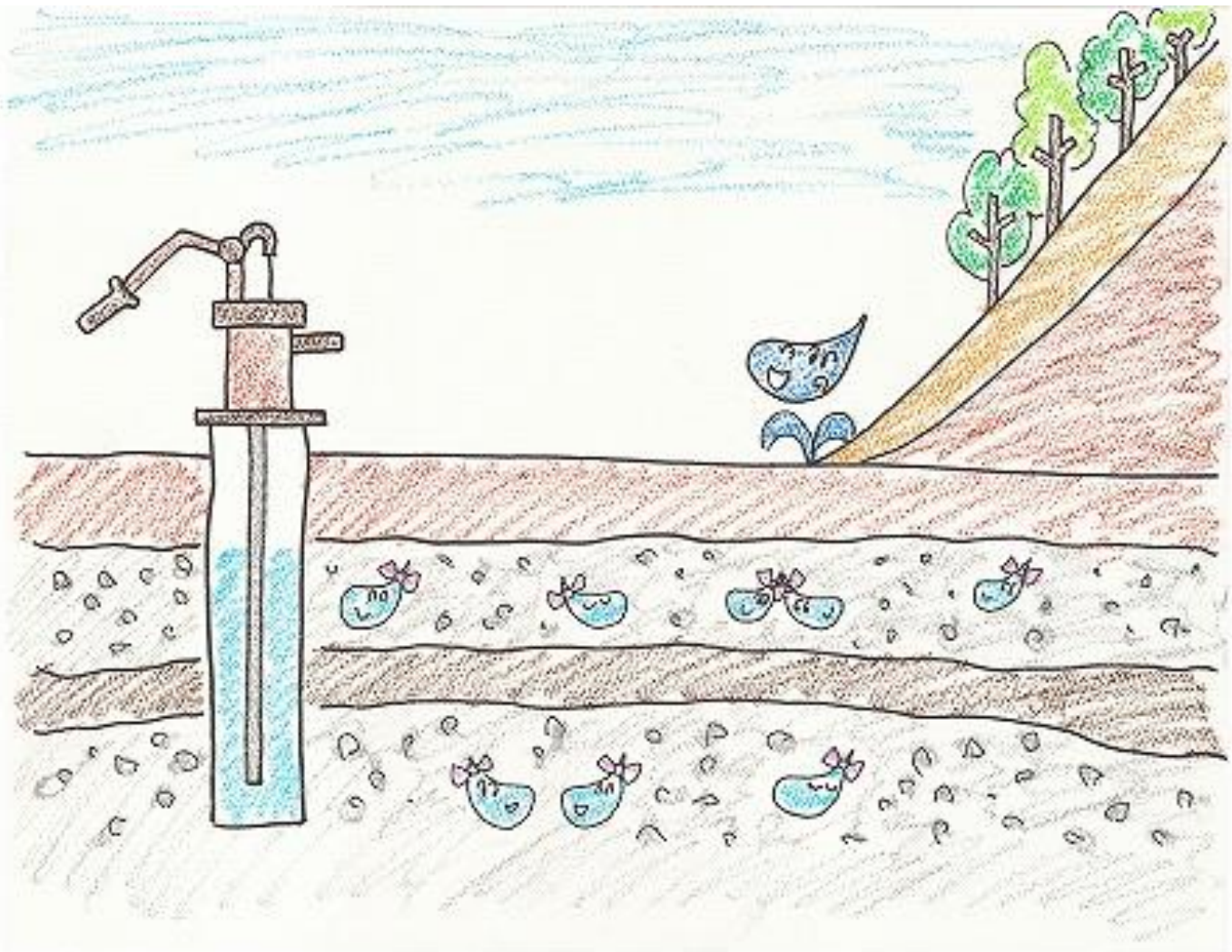
「泣いてばかりじゃ、どっししようもな

いわよ。」

「お名前は、なんていうんだい？」

ぼくは、湧き水の子、「わっきい」ていうんだ。

ぼくたち湧き水は、地面の中から地上に出てきた水なんだ。



わたしは、地下水の子、「ちっすい」よ。

いつもは、地面の中の石や砂の粒の間にいるの。でも、知ら

ないうちに二人とも仲間とはぐれてしまったの。

「かわいそうに。ねえ、カメ吉君、この子たちを生まれ故郷に
帰かえってあげまじょうよ。」

「そりゃいい考えかんがだ。ぼくたちが仲間なかまのところへ連れて行いって
あげよ。」



「ホントー」

「。うーがうー」

「ちょっと待まちて、

おまえたちぜひ入い行いくんだい。」

「フクロウじいさん。迷子まごいのこの子こたちを故郷ふるさとへ帰かえってあげよのよ。」

「そうか。それではいい物を貸かしてあげよう。気きをつけて行いって行く
と。」

おどろき

「じりやがじりや。じのどろルカーで、君たちの来た
道を逆戻りすれば、故郷へたどり着けるよ。」



「よかったね、ちっすい。せうすべみんなに会えるよ。」

「あれっ、川に出ちゃったわよ。」

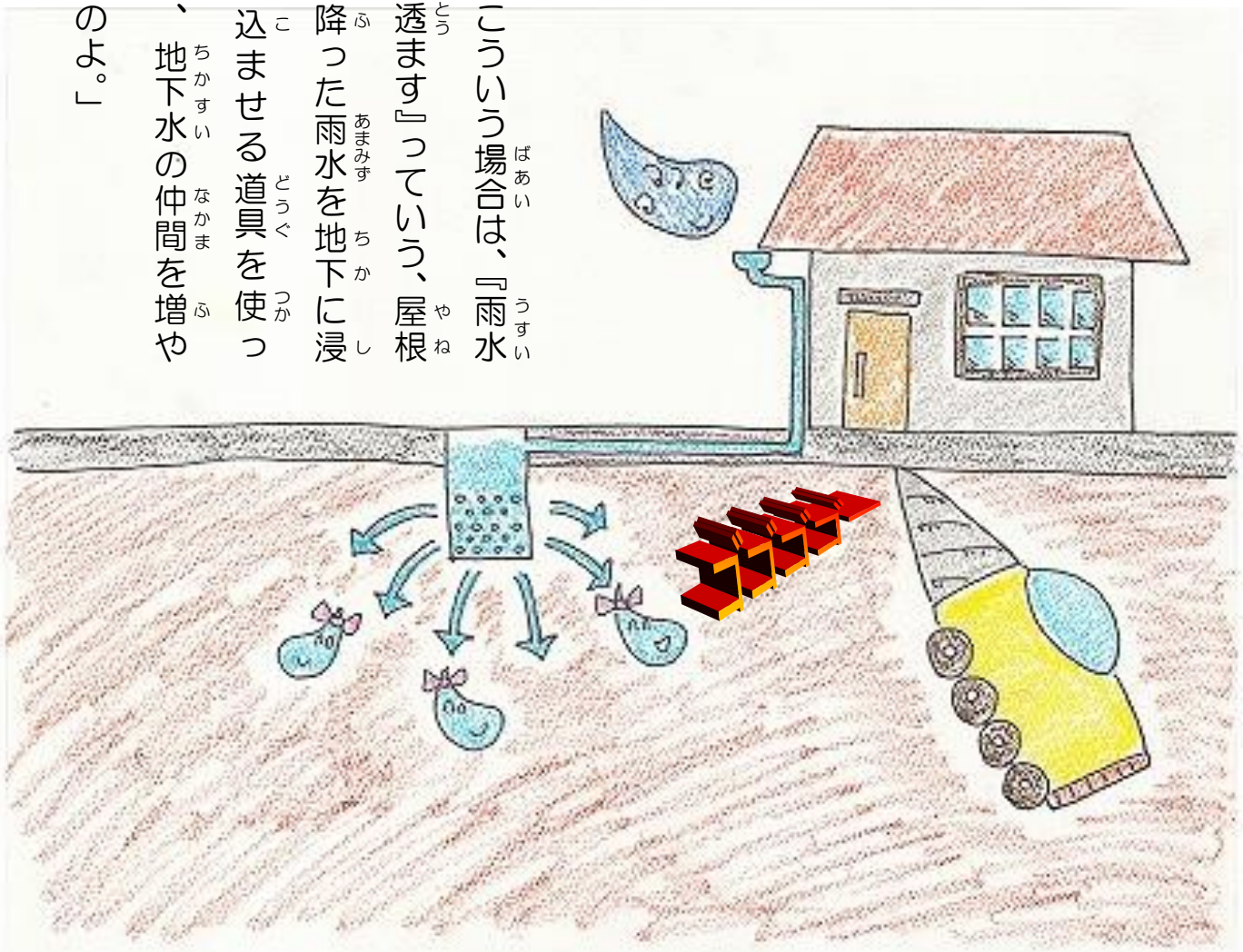
「わたしの仲間には、川の水から地下水になった子もたくさんいたわ。」



「川の水は、地下水のお得意さんなんだ。でも、逆にぼくの仲間は川の下流で湧き出ているんだよ。」

「早く次にいきましょよ。」

「ドリルカーが進まないよ。」 「道路やお家の下みたいよ。」
「これじゃ、湧き水も出られないし、雨水が地面に浸み込んで
地下水になることもできないや。」



「こういう場合は、『雨水
浸透ます』っていう、屋根
に降った雨水を地下に浸
み込ませる道具を使っ
て、地下水の仲間を増や
すのよ。」

「人間もなかなかやるね。」

「なかなか故郷の仲間のところにとどり着かないわね。」

「おおっ。なんだかうす暗いとこに出たぞ。」
「きみがわるいとこね。」



「あへんもあまの好きぢやなとこじゃなぞ。」
「いいは、なが長い間、あいた放っておかれた山の中よ。」

「あれ、かわいいお密さんがやってきましたね。ぼくは、くずはの森に住む木の妖精、『もりりん』だよ。今日は、荒れてしまった森の見まわりに来たんだ。」

「ねえ、もりりん。どうして森がこんなに荒れてしまったの？」

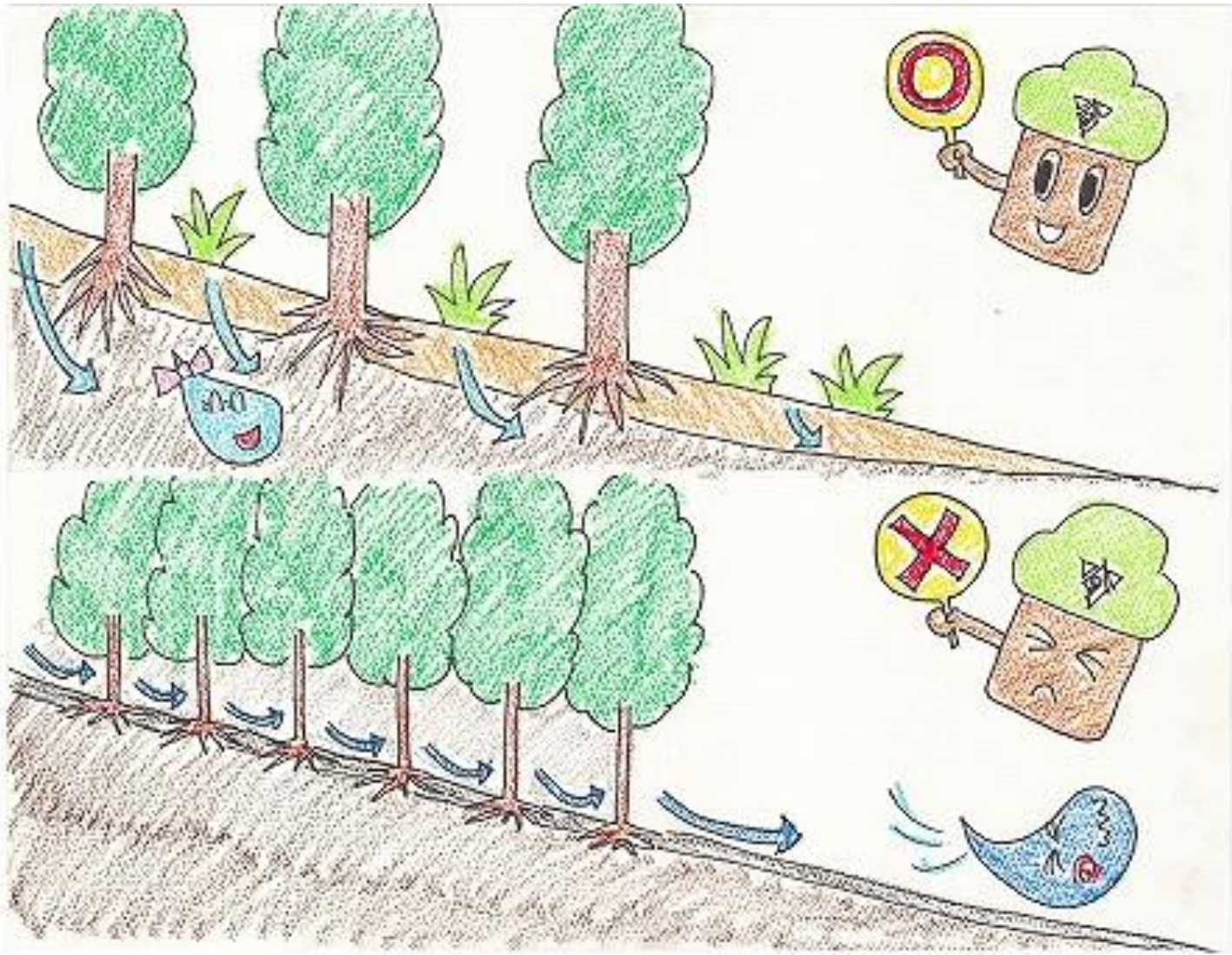


「一つには、人が作った森の手入れをしなくなっ
たからだよ。」

「それに、シカが増えすぎて、山の草や若芽を食べてしまって、地面がハダカになっちゃうんだ。」

「ブナやモミなどの丹沢に昔からある木は、大気汚染によっても減ってきているって言われているよ。」

なかま はんぶんちか やま もり はやし へいち はたけ
「わたしの仲間の半分近くは、山の森や林、平地の畑からやってくるのよ。」



「人が手入れをして、明るい森は、
下草もたくさん生えて、地面がフカ
フカなんだ。」

「人が手入れをしない森は、ひよろ
ひよろの木ばかりで、太陽の光が
届かないうす暗い森になるんだ。」

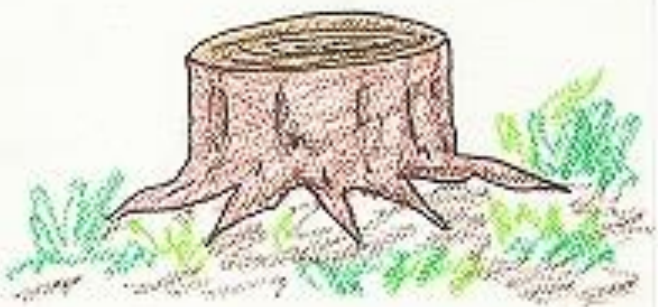
「かたい地面では、雨水のほとんどが、地中にしみ込まずに川に流れ出てしまうんだ。」

「こういう森に雨が降ると、フカフ
カのスポンジのような地面に雨水
がしみ込んで、地下水になるんだ。」

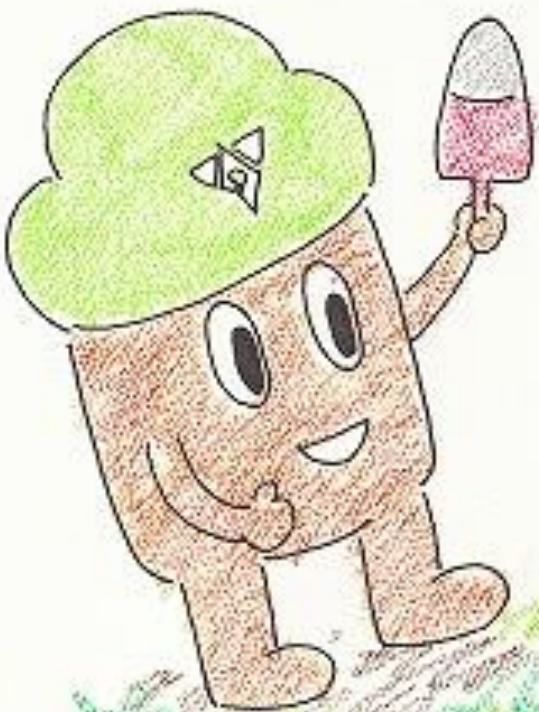
「暗い森は、下草たちも生えなくな
って、カチカチの地面になってしま
うんだよ。」

「せっかくみんなここまで来たんだから、ぼくのお手伝いをし
てほしい。」 「何をやるの?」

「この木が育てば、
もっともっと仲間が
増えるのね。」



「早く大きくなあれ」



「今日は、苗木を植えるよ。下草刈りをしたり、冬には落ち葉
を集める」落ち葉かき」もあるよ。木が大きく育つように、余分
な木を切って減らしたり、下草にも日が当たるように枝を
切り落としたり、一年中忙しいんだ。」

「そろそろ、お別れわかのときがきたみたいだね。」

「えっ！どうしてなの？もりりん」

「わっさいも、ちっすいも、ちっすいも、故郷ふるさとに旅立たびだつ準備じゅんびができたんだ。地下水ちかすい

の故郷ふるさとは、空そらにうかんでいる雲くもの中なかなのわ。」

あらやだ、「ちっすい」

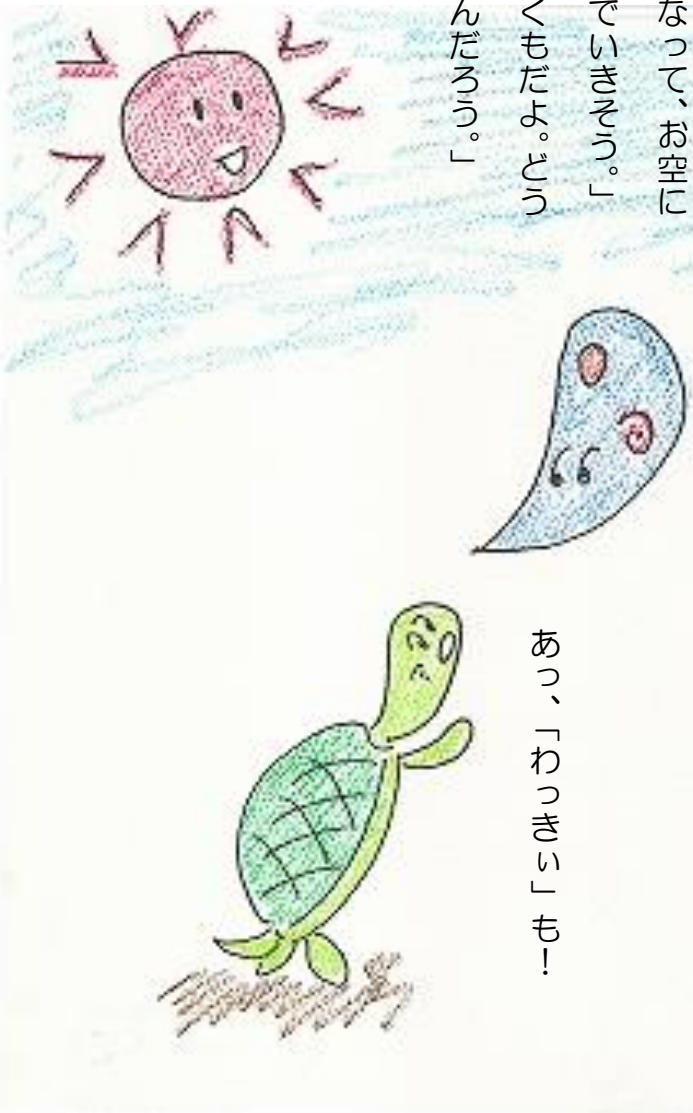
どうしての、まっぴー！



「なんだか、体からだが
軽かろくなって、お空そらに
飛とんでいきなう。」

「ほくまだよ。じい
じんだらう。」

あっ、「わっさい」もー！



「そうだったのかあ。蒸発じょうぱつして消きえてしましまうのかと思ったよ。姿すがたを

変かえて、次つぎに雨あめとななって帰かえって帰かえる準備じゅんびをしてらるんだね。」

「それなら、わみくはなわ。お気げんづからってらっしやい。バイバイ

「ありがう、まだじいじかへおまじい。」

「うわあ、フワフワして気持ちいいね。」

「ほんと、仲間もこんなにたくさんいるしね。」



「次は、森か川か田んぼか、どこに降り注ごうかな？」
「楽しみね」

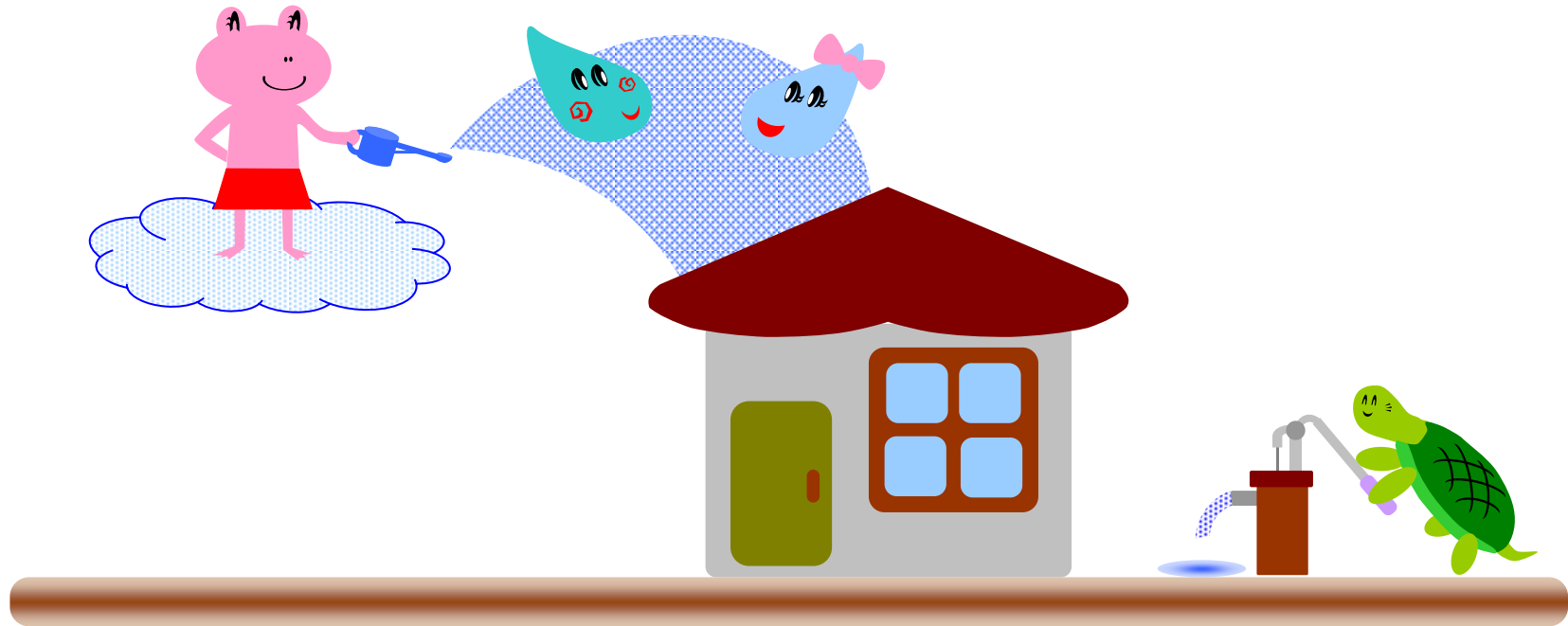
「つめたいっ」「きゃ」

「おどかしてごめんね。」



「ぴよん子ちゃんとかメ吉さんに会いたくて、一足早く降って
まぢゃった」

「それじゃ、また一緒に、水の旅に出かけましょうー！」



水の旅人「わっきい&ちっすい」 平成25年(2013年)5月
秦野市 環境産業部 環境保全課 <http://www.city.hadano.kanagawa.jp/>